留学最終報告

高知県立大学文化学部文化学科
齋藤花梨

私は 2018 年の 9 月から約 11 か月の間、中国の北京連合大学へ語学留学をさせていただきました。留学中には様々なトラブルもあり、決して楽しいだけではいられませんでした。しかし、結果としてそれらすべてが自身の成長につながったことを帰国した今感じています。ここではまず、留学の機会を与えてくださった先生方にお礼を申し上げます。

私は入学前から大学生の間に留学をしたいと考えていました。しかしもともと興味があったのは英語圏もしくはアラビア語圏で、中国に対して意識は向いていませんでした。そのような状況の中、なぜ中国への留学を希望するようになったのか。それは、第二外国語の授業を受けはじめたことがきっかけです。中国語を学ぶうちに中国語の音や文法に惹かれ楽しいと感じるようになりました。また、やはり費用の安さも大きな決め手となりました。英語圏に行くとなると、たとえ奨学金をもらうにせよ費用は大きくなります。そのような理由から中国に行くことを希望するようになりました。

そして中国への留学が決まってから半年後、北京への留学が始まりました。私は飛行機の遅延もあり夜の 9 時過ぎに北京空港に到着したのですが、その空港のあまりの広さと海外旅行経験の無さからどこへ進めばいいのかわからず右往左往してしまいました。しかし機内で仲良くなった女性が一緒に出口まで来てくれたため、無事にチューターの学生たちと合流することが出来ました。その女性とは北京にいる間もよく会うようになり、とても良い出会いだったと感じています。また、チューターの方には留学中大変よくお世話になりました。これからは私がその恩を日本に留学に来ている学生たちに返したいと思っています。

さて、ここからは学校生活についてご報告いたします。登録日に行われたランゲージテストの結果によって五段階にクラス分けが行われました。2018 年度は 9 月 9 日から始まり、私は一級の授業を受けることになりました。大部分の留学生は午前中のみ一日二教科を受け、午後は自由に過ごしています。授業科目としては総合・口語・リスニング・読み書きの 4 科目がありました。学期はじめは自分の名前も中国語では言えず、知っている単語も数少ないものでしたが、先生方に日常で使う言葉や、季節のエピソードなどを英語を交えて教えていただくことで、次第に簡単な感情表現ができるようになりました。特筆すべきこととしてそこでの語学の身に付け方が挙げられます。日本の外国語教育は文法重視な部分があると感じられますが、その大学では教科書内容に即した簡単な劇を行っていました。この劇を時にアドリブを交えて行うことで実践的な中国語能力を身に付けていきました。その結果後期に入るあたりから自分の語学力の向上を実感できるようになり、自然とクラス内での

会話も増えていきました。

大学は希望者には午前中の授業だけでなく、課外学習や文化科目も実施していました。9月の中秋節には月餅づくり体験があり、また、通年で太極拳や習字、お茶などの中国文化体験の場が設けられていました。私はこの中から太極拳を選んで受講していました。受講するまでは何も意味のないただの型だと思っていたものが、先生の説明を聞くことで一つ一つ意味を持つようになっていったことがとても印象に残っています。太極拳は相手の力をうまく利用して相手を倒す武術だということが分かりました。中国に行ってからは運動をすることも少なくなり、食生活も乱れがちだった私にとって、太極拳の時間は体を動かすいい機会にもなっていたように思います。

授業時間を使って一人では行きにくいような長城へも連れて行っていただきました。私が万里の長城に行ったのはその時が初めてでした。季節は 5 月でまだ長城は寒いのではないかと危惧していたのですが、とても気持ちよく晴れた日で気温もちょうどよく絶好の長城日和となりました。中国の世界遺産はスケールが比にならないほど大きく、迫力が感じられました。その絶景もさることながら、その日に一番深く思い出として残っているのは日本人の友達とではなくクラスメイトと行動を共にしたことです。ロシア、ポルトガル、ドイツ、韓国の友達と会話をし皆で長城を登っていくことで、より一層忘れられない思い出となりました。

この一年間の間には北京以外にも、香港・マカオや蘭州、上海・蘇州など様々な場所へ行く機会がありました。その中でも特に印象に残っているのは蘭州への旅行です。食文化や帽子などにちらほらと私が知っている中国とは異なるような異国の文化が感じられ、中国の広さと多様性を学ぶ一助となりました。ウイグル人の主食であるナンを食べる機会もありました。日本でもカレー屋さんなどで食べられるナンの生地にヒマワリの種やごまをふりかけて少し厚く固焼きしたようなものです。なんとも素朴な味なのですが一度はまると止められない美味しさで、お土産としても北京に持って帰りました。また蘭州にいる間にウイグル料理にもはまってしまい、北京に帰ってきてからも外食をするたびにウイグルの料理の店を探していました。しかし、よく探してみると大学の食堂内にもそのような料理の店があることに気づき、とても驚いたことが思い出となっています。北京のほかの大学にも幾度か訪れたのですが、その中ではすべての学生食堂がハラールに対応していました。多民族国家であるからこその多様性と、統一されていることが望ましいという声、その二つが入り混じるのが中国という国なのかもしれないと考えさせられました。

その一方日本の大学にもハラールメニューやそれに対応した環境づくりをする必要性を感じました。一般的にムスリムというと西アジアやインドネシアに多いというイメージがありますが、日本への留学生が多い中国にも回族などのムスリムが多くいます。またそれも蘭州のような西側の都市にだけではありません。私の住んでいた大学近辺にもハラール料理の店が多かったことから北京でも相当数が暮らしていると考えられます。ハラールに対

応する環境づくりは、今後留学生を迎え入れるうえで彼らの選択肢を広げるために必要だと考えます。。

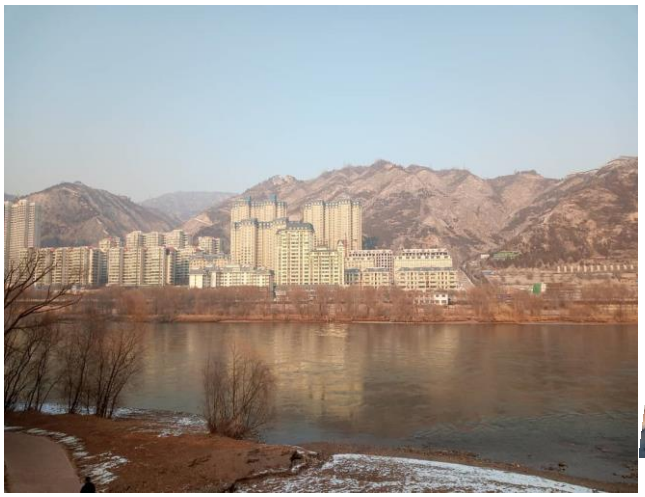
この一年を経て、自分の中で最も変わったことは中国人およびその他の外国人への理解が深まったことです。留学以前はメディアで度々伝えられるような良くないイメージばかりが先行し、留学先に対して不安に思うこともありました。しかしながら、実際に行ってみると機内で出会った女性しかり、チューターの学生しかりとてもやさしく情に満ちている人ばかりでした。まだ中国語をうまく話せない中スマホを壊し焦っていた時、チューターの方は私を励まし修理のお店に連れて行ってくれました。また、スーパーマーケットで何を買おうか悩んでいるとき、店員さんは拙い私の中国語にも怒らず笑顔で「ゆっくり話せばいいよ。」と言ってくれました。私はこのような温かい言葉や行動に支えられ、無事に中国留学を終えることが出来たのだと思います。また、クラスメートや寮の仲間たちとの交流も異文化理解を深める一助となりました。特に前期の居室が隣でクラスメイトでもあったアンゴラ人の学生との交流は深く印象に残っています。アフリカの人との交流の経験がなかったため、最初は少し距離がありました。しかしクラスで少しずつ話すようになると次第に彼女たちも年相応の学生であることに気づかされ、距離が縮まっていきました。私から見ると一見大人びていて近寄りにくい雰囲気を持つ人々も意外にも私と似ている部分を持っていることが分かり、関わりを持たないと分からないことが多いと思い知らされました。

このように外国人の思いやりや親しみやすさに触れる中、日本に対する考えも深まる一年となりました。「日本人は優しい、日本はいい」と知り合った人々は皆口をそろえてこう言います。その一方私は中国人やその他の国々の人の方が日本人以上に優しく、情に厚いのではないかと感じるようになりました。そのことを日本に長く住んでいた中国人の友達に話した際、彼女はこう答えました。「日本人は優しい、けれど必要以上に近づかせない壁がある。」確かに旅行者から見た日本人は優しく、だからこそ皆口々に日本を誉めるのかもしれません。しかしそれ以上に、私が外国の人に対して勝手なイメージを持っていたのと同じく、イメージとしての日本が先行しているのではないかと考えさせられる出来事でした。このように内外双方の文化に対して考える機会があったこともこの留学で得たことの一つです。

昨年の夏から始まった留学を終え、とても濃い一年を過ごした中で語学力だけでなく考え方や態度にも自分の中で変化を感じられます。このような貴重な体験をさせていただいたことに大変感謝しております。また、この留学中に支えてくださった全ての方に感謝を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

一級のクラスでの集合写真

故宮の壮大な景色



蘭州の景色とナン

金山嶺長城にて二級のクラスメートと

留学生による文化祭

以上。